

モーツアルト盤を聴く (13) (HP 収載)
ー最新アナログシステムでの試聴(13)ー

1. 始めに

前報(12)に引き続き、新たに入手したモーツアルトのアナログ盤を最新アナログシステムで試聴していきます。

2. モーツアルトのアナログ盤の試聴方法

モーツアルトのアナログ盤の由来およびアナログシステムの状況は前報(1)のとおりです。今回は、LINN LP-12 と ThorensTD124 を使用します。

前報(9)から、アース関係が仮想アース Crystal E の導入(7)で報告のとおり、仮想アース Crystal E の追加とアース専用ケーブル Clone 2 が加わっていますが、LINN LP-12 と ThorensTD124 のシステムに関係するのは、ZANDEN Model120 のアースケーブルが Western の撚り線から Clone 2 に代わっていることです。

音源は、新たにモーツアルトのアナログ盤を使用していきますが、今回も、アンサンブルの曲です。

LONDON SLA1067

モーツアルト デヴェルティメント 17 番

ウイリー・ボスコフスキー指揮ウイーンモーツアルト合奏団

3. モーツアルトのアナログ盤の試聴結果

LONDON 盤ということで、DECCA、逆相、第 4 時定数 High で聴いていきます。この盤は、クレジットによると、前報(12)の盤と演奏や録音が同じです。前報(12)の盤が、ダイレクトカッティングシステムと称する、テープ再生装置とカッティング装置を直結し、テープ再生装置のヘッドアンプとカッティング装置のカッティングアンプは真空管アンプを使用していたのに対し、今回の盤は、マスターが同じものの通常のカッティングのようです。

LINN LP-12 の再生では、このことが、音質にも現れており、今回の盤も艶もありながら爽やかな良い演奏ですが、前報(12)のダイレクトカッティングシステム盤に比べると、真空管アンプらしい艶は若干後退し、広大な音場表現も薄れてきています。

ThorenTD124 の再生では、ウオームトーン気味で生き生きとした演奏の様子が再現されていますが、前報(12)のダイレクトカッティングシステム盤に比べると、LINN LP-12 の再生と同様、艶は若干後退し、広大な音場表現も薄れてきていま

す。

4. まとめ

ターンテーブルアキュライザー、ダンパーフレーク、Crystal E の導入および ThorenTD124 のターンテーブルシートの交換などの総合的な効果として、元の録音の優秀なことは、LINN LP-12 と ThorensTD124 双方の再生でもよく分かりますが、前報(12)のダイレクトカッティングシステム盤との違いも明確に聴き分けられます。

以上